



TITLE:

籌[海]圖編日本航路考(一)

AUTHOR(S):

[藤]田, 元春

CITATION:

[藤]田, 元春. 籌[海]圖編日本航路考(一). 地球 1935, 24(2): 135-145

ISSUE DATE:

1935-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184468>

RIGHT:

籌海圖編日本航路考 (一)

藤 田 元 春

籌海圖編は、倭寇平定の功で名高い胡宗憲の著述となつてゐるものであるが、實は其幕下に居た崑山の鄭若曾の著述であることは鄭開陽雜著と稱する同種の書の跋文をみても明かである。この人は嘉靖の初めの貢生で若くして魏校及び湛若水を師とし、有名な王守仁、歸有光、唐順之等と共に切磋琢磨の功をつむだ人である。勿論王陽明ほどに名を成したわけではないが、地理の學に委しかつたために、胡宗憲の幕下について大に平倭の功に與かつたのであるが、この時彼に萬里海防圖、江防考、日本圖纂、朝鮮圖說、安南圖說、琉球圖說、海防一覽、海運全圖、黃河圖議、蘇松浮糧議等十數卷の著述があつて、之を胡氏の參考に供したのであつた。そこで胡宗憲は鄭氏の原稿に基き、丹陽の邵芳を舉

げ籌海圖編十三卷を輯議したと稱されてゐる。かくて籌海圖編なるものは、倭寇の對策として沿海八千五百里の間にわたる險要を詳悉し、古代からの日支の交渉は勿論、既に出版されてゐた廣輿圖、海道經、日本考略(薛俊著)、及び陳侃の使琉球錄等主な日本資料の外に、新に鄭子若曾のつくつた日本圖等をも集大成したので、明末に於ける支那人の日本智識は殆どこの一編に網羅さるゝに至つたのである。そこで後出の人も、日本のことを記すに當つては、鄭若曾の作したこの書をそのまゝ丸寫しをするの例で、例へば廣輿圖(嘉靖版)の如き、崑山鄭子若曾として日本圖をそのまゝのせてゐるやうに、文献の上に於ても、日本への航路の如き、すべてこの鄭若曾の記錄を丸寫しにしてゐないものはない。

このうち右の日本國圖に關しては、秋山謙藏氏の「日支交渉史話」に地名の比當や其來歴變遷がしるされてゐるし、筆者も嘗て之を「歴史と地理」第三四卷にのべたことであるが、日本に關する支那人の記録をみると、漢字の寄音で記されてゐるの例甚だ多く、六ヶ數くてとてもよめない、従つてその地が今日の何所であるか容易にわからない。自から日支交渉の重要な航路であつても、其土地のいづれか不明であり、陳腐漢であるために、多くの人はこれを高閣にゆだねて、一顧だも與へないといふことになつてしまつた。しかし日支間の航通路はひとりこの圖編の記事のみではなく、鄭舜功の「日本一鑑」

にも出づれば、平澤元愷の「瓊浦偶筆」其他にも出てゐるので、彼此參照することによつて、明末いかなる航路をとつたか、ぼゞ明になりうるのである。そこで何はともかく籌海圖編の日本航路を解説することが出來くれば、やがて其他の多くの文献に見ゆる航路名も、順次明にな

つてくると考へられるので、茲に淺學を顧みずして、圖編の航路を解釋することにしたのである。

猶鄭若曾が、どうしてこれ程の詳はしい日本語や日本の地名や港灣名、山川名・國名等を知り得たかといへば、嘉靖三十四年日本に使した胡宗憲の幕下蔣州及び陳可願の將來した資料によつたもので、蔣州は山口や豐後の二島主を歴訪したと明史に出てゐる。従つてこの圖編に記してある航路は、實に明末に於ける日支の公道ともみるべきであり、閩越の地と我國との直接交通は、文明年中亂を薩摩にさけた桂庵禪師をして、明國に遊び「島陰漁唱」三卷を作くらしめ、歸國して後薩摩は實に朱子學首唱の地となり、その四世の法嗣文之和尙に至つてはじめて四書集註を以て弟子を教へ、徳川時代文藝復興の魁をなしたことや、文明十三年もしくは其以前から薩摩と南支那との間に航路が通じたので琉球の文船も何回となく坊津又は山川に入貢

するといふやうなことから、天文十二年にはポルトガルの船を種ヶ島に導きて鐵砲をつたへしめ、瞬くひまに鳥銃が日本の武器となり、この新式の武器は嘉靖の頃には倭人から支那へ輸入されるに至つた。即ち名物六帖に何氏兵錄をひき、鳥銃中國原無、此器傳自倭夷始得之とか明王鳴鶴登壇必究云、鳥銃出嘉靖間、最猛烈、是和人用以肆技巧、中國習之者也など、記さるゝまでになつた。果して倭人が之を傳へたかどうかは疑はしいとしても、ある一部の支那人が、鳥銃を倭人の手から得たことは疑ふを要しないと考へられる。さうした多くの事實から下に解説せんとする航路の日本近世の文化に寄與する所は甚大であるといはねばならない。これ實に筆者がまづこの航路を解説せんとする所以でもある。まづ本文を掲記して逐次これを説くことにする。

使倭針經圖說

太倉使往日本針路、見渡海方程、及海道針經、

籌海圖編日本航路考

太倉とは云ふ迄もなく、吳都蘇州から流れて出る劉家河沿線にあつて、三國時代の吳がこゝに東倉を置き米穀の出入にあてた所だといふから古來海上への交通の要點である。崑山縣といふ名もあるが、劉家河の揚子江に出る所に劉家口といふ港があつて、そこは元代には、江蘇の米穀を海路天津へ積みだす要地であつた、恐らく應神紀三十七年春二月、阿知使主、都加使主を吳に遣はして縫工女を求めらるとか、仁德天皇五十八年吳國朝貢など記されてゐる時代に、既にこの太倉は日本への渡海の要港であり貿易港であつたのであらう。其後揚子江の土砂が段々と河口を埋めて、溯江が不便となるにつれて、吳淞江ワシキョウの方が通航に適したとみえ、明代以後清朝になつて上海が江口の大貿易港になつた。であるから、太倉は上海の發展以前に於ける最古の海港であるといつて過言ではなく、崑山と日本との關係は應神天皇以來明代まで一千數百年の親交であつたのである。そこでこゝに太倉使

とある以上、その使者はいつ頃に誰がこの港から出たかといふことが問題になるのであるが、阿知使主當時の航路は、太倉を出ても、江口から北方山東岬角を迂回し、朝鮮沿岸航路をとつたことは、日本紀に明記されてゐるので、本書の太倉使などの道とは全くちがう、下つて元代に元使趙良弼が日本へきたこともあるが、この時は高麗王植が其通事として徐稱をつかはし元使を導いたといひ、屢々對馬や太宰府に來ると同時に日本から彌四郎といふものも至元八年に入朝した（倭奴朝貢事略）など、ある位で、高麗を介してゐるから、勿論朝鮮沿岸經由であつて、本書のごとき南路經由ではなかつた。

明の太祖洪武二年に使臣趙秩が日本に使はされ、析木崖に至つたが、日本の懷良親王にこばまれて入れなかつたとある。この時の使臣の路亦不明であるけれども、洪武五年に、天寧寺の祖闢がやつてきた時には翁州（寧波）から啓擢五日其國境に至り、月をこえて始めて王都に入

るとあつて、洛陽西山の精舎で夢窓國師に款待されたとある。しかし勿論この人は太倉使ではなかつた。そこであれやこれやを採訪したところ、永樂九年にまたまた日本へ遣使して、倭寇を止めしめやうとしたことがあつた、圖編の文に

永樂九年遣三寶太監王進奉使日本、收買奇貨、至寧波選壯軍顧通、號大漢將軍、同往、彼夷初御以禮、後起別議、輒下、瀛江龍于港口、得支港潛出、彼夷婦密引而還。

とある。文の上からみるとこの時もうやう目的を達してゐない。大漢將軍と號する海賊を雇つて日本に來たが、初めは仲もよかつたが、後で喧嘩別れをしたので、瀛江龍于港から脱出したとあるが、瀛江は今日どこであるか殆ど見當がつかない、一方日本の文献では應永十八年に明船が兵庫から歸帆すといふ記事があるから、或は瀛江は澱江の誤記かもしれない、處がこの記事が實は右の太倉使なのであつた。それは日本一鑑の序に、右の渡海方程又は針經に航路の

あること、「四海指南」にも三寶王進之使日本を載せてゐることを明記して、

取道太倉用 葦山放洋而往取野顧寄香
次抱里寄香坊津沿入其都

とあるのである。簡單ではあるが、これを右の文に比して、いかにも太倉使往日本といふのは、この三寶大監王進の使した時に出来たものであつて、これを案内したものは大漢將軍と號してゐたことがわかつたのである。或はこの大漢將軍は日本人ではなかつたかとさへ思はれるのである。とにかく至元八年には彌四郎が行つてゐるし、同五年には對馬の塔二郎や稱二郎などが元使「黒的」に捕へられて行つたとの報告がある位だから、西國の舟人で支那へ行く人々は極めて多く、其の自然の結果として、倭寇當時には、浙江江蘇の海岸に、多數の日本人の移民地があつた。上海附近の川沙窪（江蘇省南匯縣）柘林（江蘇松江縣東南七十二里）などは其尤も大なるものであつたが、不幸にして男ばかりの植民

で、女は稀少であつたために、其後は消失してしまつた。けれども上海附近は勿論、舟山列島一帯の海島は、日本の人々には或は第二の故郷だと考ふる迄に行きなれた所であつたことは疑ふべくもない。自からこの方面から薩摩坊津への往返は本書記す通りに、容易に行はれたことであつた。以下本文を一行ごとに記して解答を加へるであらう。

太倉港口開船用單乙針一更船平

太倉から劉河に従ふ、方角は東南である、更は一日を十等分したものであるから、今の二時間半、香を焚いて度とした。線香一本といふ時のはかり方であるから、不確實であつた。

吳淞江用單乙針及乙卯針一更平

劉家口から大江に出で岸に沿ふて東東南に下ると吳淞江口となる、ウースン港は今日は上海の外港で寶山の南にあり、黃埔江に臨む、故に今の吳淞とこの文の吳淞を同一視してはならぬ前後の關係からみると吳淞江は太倉の劉家河に

も通じたクリークで、嘉定縣を通つて寶山の北に出た水道のことであつたらしい。

勿論この吳淞江と黃埔江と水脈は通じるが、今日では、上海が出来てから黃埔江を改修もし浚渫もしたからこの方が廣くもあり深くもあつた。けれども吳淞口と昔の名を用ひてゐるのである。

寶山到南漚嘴、用乙辰針出港口打水七丈沙泥地、是正路三更見茶山、

寶山といふのは寶山縣のあるところであるが太倉縣東九十里にあつて、本は嘉定縣吳淞の地域であつた、元代北京へ江南の米穀を運ぶために海路をひらき、やがて大運河をつくつたが、元末に運河は荒れて通じなかつた、そこで明太祖は洪武元年湯和に命じ海舟をつくつて北征の士卒を餉ひ、天下既に定まつて後、水工を募り萊州（山東海角の北）に海倉をつくり、そこに粟を積んで北方へ給付したが、世祖北京に入るに及び永樂元年、平江伯陳瑄をして、海運を督

し糧四十九萬餘石を北京にはこばした。そこで太倉から江口に出て北へゆくための目標が必要となつた、陳瑄はこの時江畔平滑の地に、方百丈高三十餘丈の丘を築くことを乞ひ、永樂十年に完成の式をあげ、寶山といふ名を賜ひ、御製の碑文を立てたといふ所である。永樂九年の太倉使も吳淞江口へ下つて、この新しい寶山を仰いだことゝ察せられる、但しこゝは清代雍正三年になつて寶山縣となつた。

寶山からさき江の流れに従ふて愈大海に出る、揚子江の右岸突端の低い沙地を南漚嘴といふ、今日の揚子岬である、こゝまでくれば、そのさはは漫々たる大洋で海とはいへ、揚子江の泥で海水はチヨコレート色である。即ち水の色は赤い黒い茶のやうにも見えるといふので、江口の一孤島を茶山（無人島）といふ、余山ともかいてあるが崇明島の東にある。今も猶長崎から上海への航路の目標である。但し今日は崇明島の南に銅沙とか圓砂とかいふ低平な三角洲が出来

てゐるが、永樂九年當時はまだ水上に現はれなかつたかもしれないで、南漚嘴からやゝ東に出で兀然たる茶山が目標となつたのであらう、(北緯三十一度二十分、東經百二十二度十五分) 舟の方角は東東南に進むこと約三更、支那里で百六十里、茶山が見えるといふのである。南漚嘴の近くで打水六七丈のところを通るのである。

自此用坤申及丁未針行三更船直至大小七山、

灘山在東北邊。

即ち南漚のさきまで東走百二十二度附近に達し茶山をみるところで、舟の針路を西西南にむける、もしこゝから東北へ轉ずれば、一線日本にゆけるのだが、昔はさうは出来なかつた。沿岸の島を目當にするからである。そこで一旦西西南に向ひ、さらに南南西へ舟を進め三更、凡百五六十里で大小七山に達する。これは今の大戢山、小戢山である、山といふのは日本語の島シマと同じい、杭州灣の入口にある、群島である。灘山は今の灘濟山(灘虎山)で浙江省に屬する、

しかし陸は江蘇省の方が近い。大小七山から西にあるのだが、この文では灘山が大小山の東北にあるやうに讀めるけれども實はさうでなくて大小山が灘山の東北邊にありといふことであらう。

灘山下水深七、八尺、用單丁針及丁未針三更船至霍山

灘虎島では水深は七、八尺だ、そこから主として南の方へ船をむけること凡そ三更にして霍山につく、この島は浙江省鎮海縣の海上にあつて東霍、西霍の二つから成立し、舟山島に近い。

霍山用單午針至西後門

磁石はやゝ西へふつてゐると見えて、單午針とあるけれども、實は霍山から南々東にあたつて、舟山島の西に金塘島がある、この兩島の海峡を西後門といふ。

西後門用巽巳針三更船至茅山

西後門即ち金塘海峡から、針を巽即東南に轉ずる、磁石の傾度を考へると東へ轉ずることにな

る。茅山マオサンは今日は猫山ネコサンと呼ばれて、舟山島の首府定海の前面にあつて、定海港の風波を防ぐ。茅山といふことで定海に入つたとみてよい。

茅山用辰巳針、取、廟州門、船從門下行過取、舛羅嶼。

この文章で門といふのは海峡である。山といふのは島である。廟州門即廟島海峡を南へ下つて舛羅嶼につく、この島名不明であるが、小干山又は大媽蟻山であらう、いづれも舟山島の南になる。

舛羅嶼用丁未針、經、崎頭山、出、双嶼港。

舛羅も崎頭も船が入れる、崎頭といふのは浙江省の大陸の尖端で舟山の對岸崎頭山である、舛羅から東南にすゝむで双嶼港に出る。双嶼港は海防圖によれば陸奥山ロシアウシヤンと浪槽頭ウナジマとの中にある。即ち陸奥は今の地圖で六横山ロウコウサンと記されてゐる島である。

双嶼港用丙午針三更、船至、孝順洋及亂礁洋。

六横島の南は今の地圖にも孝順洋とある、浙江

の象山港口にあたる。双嶼港口の水流は急であり、孝順洋の水深十二托泥地である。亂礁洋は孝順洋の東を限つて梅散列島の羅布するための名である。つまり六横から南東に、この列島に沿ふてゆくのである。こゝは列島のために水が深くない、六托泥地とあるのである。

亂礁洋水深八九托取、九山、以行、

すると梅散列島につゝゐて雙山、南葦山、積谷山といふや、目立つた島が列ぶ。この南葦山につく、この島は右の三島のうち最大である。九山は寄音で、今の地圖は葦山と記してゐる。

九山用單卯針二十七更過洋至、日本港口。

日本一鑑の王進使航路は、九山から野願に至るとあるが、この文章にはこれを略し、九山から東へ一線二十七更、即ち三日程で日本の港に至るとのみ記してゐる。葦山は北緯二十九度十分東徑百二十二度である、その正東は吐噶喇群島である、従つて夜久島につくといふのが本當であつたと考へられる。

又有「從」鳥沙門「開洋七日即到」日本

これは舟山島の東に朱家島と鳥沙島とがある、その鳥沙の南の海峽を鳥沙門といつたので、朱家の北には普陀山とよび、有名な普陀落寺がある、其觀音は日本人沙門慧夢の將來して開基したといふので名高い靈地である。そこで倭寇共も多くは普陀、朱家、鳥沙一帯の地に移住してゐたので、鳥沙と日本との交通は約七日、順風になれば、もう少し早かつたかもしれないが、まづ七日といふ傳説があつたからこゝに之を記したのである。

又陳錢山至日本用長針

陳錢は舟山列島の最外端で枸杞島の東にある岩山である、倭寇の根據地となつた所で、こゝから日本へは東北だといふのである。この鳥沙と陳錢については「倭國事略」に更らに詳しく説明があるから、これを左に摘記しておく。(原文)

倭の南琉球に至るは必ず薩摩洲より、開洋順

風七日。其貢使の來る必ず博多より開洋、五島をへて中國に入る、造舟水手ともに博多にあるが故也、其入寇のごときは即ち風のゆく所に隨ふ、東北風猛なれば則ち薩摩より、或は五島より、大小琉球に至つて、風の變遷を見る。北多ければ則ち廣東を犯し、東多ければ則ち、福建を犯し、澎湖島にて鯨を分ち、或は泉州等の所にゆき或は梅花所、長樂縣等の所にゆく。

若正東風猛なれば、則ち必ず五島より天堂官渡水を経て風の變遷をみ、東北多ければ則ち鳥沙門に至りて分鯨し、或は崑山海關門をすぎて温州を犯し、或は舟山の南よりして定海を犯し、大猫洋をへて金塘蛟門に入り、象山奉化を犯し、昌國を犯し、臺州を犯す。

正東風多ければ則ち李西嶼、壁下、陳錢(舟山列島外端の浪崗列島の名)に至りて分鯨し、或は洋山の南よりして臨觀を犯し、錢塘を犯し、太倉を犯し、或は南沙をすぎて大江に入り、茶山をすぎ瓜儀常鎮を犯す。もし大洋にありて風

たちまちに東南にむかへば、則淮陽を犯し、登萊を犯す。若五島にあり開洋して南風まさに猛らば則ち遼陽に趨き、天津に抵る。

大抵倭船の來る恒に清明の前後にあり。此風候常ならず、屆期方に東北風ありて多日變ぜざる也。五月を過ぐれば風南より來る。倭行くに利あらず。重陽後亦東北あり、十月をすぐれば風西北より來る、亦倭の利とする所に非ず。故に防春は三、四、五月を以て大汛となし、九月を以て小汛と爲す。

まづかうした記事で、いかに日本人が巧に風向を利して、彼の濱海に出沒したかわかると同時に、葦山、烏沙門、陳錢、壁下等の海島が倭人の分艚の足溜りになつたことも明になるであらうと考へる。今にして殘念なことは、これらの倭人は男ばかりの植民であると同時に、劫掠を業として、農事に携はらなかつたために、僅に數百年の後に於て、蕩然として其影を失ふたことであつた。後の海外に赴くの人ば、よく

この事を考へて、家庭を擧げて移民し、平和裏に土着耕作者たらんことを祈らざるを得ない、それでも舟山諸島には日本人の居住したものも多かつたため、清朝になつても舟山には洪武錢が通用した地域であつた、蓋し洪武錢は天龍寺船時代の支那の通貨であつた。そこで日本の水夫は、この錢を取引に用ひこの洪武通寶を後々迄も鑄造してこの移民地で流行さした結果、自から舟山には洪武錢があるといふことになつたと見てよいらしい。

和漢三才圖會をみると薩摩國の土産の中に芭蕉布、櫛(世云唐櫛)洪武錢、鹿皮、牧駒など、記されてゐて、中には琉球産の芭蕉布或は太布のごとき輸入品かとも思はるゝものもあるが洪武錢にはコロセンと振假名までついてゐる。恐らくこれは輸入でなく薩摩藩などで貿易のために鑄造したものの多かつた證據ではなかつたか。

一旦移民が入ればどこかにその名殘は濃かれ

薄かれ、色のつくものだ。一方舟山では洪武錢通行といふことで彼地の人々に記録されると同時に、日本でその錢が薩摩の土産と出てゐる。一葦帶水の目支の關係の密接せる凡そ如斯しで

ある。これは獨り有史以後の文字あつてからの關係ではない、太古恐らくはかうした航路から西九州は夙に文化に趣いたものと考へられるであらう。

日本輸出陶磁器の動向 (一)

杉 山 精 一

一、緒 言

二、輸出陶磁器の世界市場に於ける地位

三、輸出陶磁器の地域的變遷

四、陶磁器輸出組合の現狀

六、北米部

八、南洋部

十、比律賓部

十二、馬來部

十四、近東埃及部

十六、中南米部

十八、結 論

五、陶磁器輸出港

七、英印波斯部

九、濠洲部

十一、佛印部

十三、滿洲支那部

十五、阿弗利加部

十七、歐洲部

一、緒 言

日本の工業發展は原料資源の獲得と同時に製品販路擴大が相伴つて、是が日本對外貿易の全動向を支配する最大要素で、國內を見るに原料資源に乏しく、國內市場は狹隘なる故緊急問題は新市場を外國に開拓する事である。近時我國の商品は廉價を以て先進國に挑戦をなし、全世界の市場を席捲せんとし、販路を勢ひ比較的未開地に求めんとするは、當然の動向で、その結果